

ライティングセンター（仮称）の試行活動報告

—2009年度中上級 I コース作文「内容の相談」について—

中山 めぐみ

はじめに

本学の日本語教育センターでは、2011年度から留学生を対象としたライティングセンター（課外で留学生が日本人 TA との対話を通じて作文支援を受ける制度）を開始させるが、それに先立ち 2008年度から廣池学事振興基金による助成を受けた共同研究として、一部の日本語作文クラスですでに活動が試行されている。2008年度は基本コースの初級コース（1学期）と初中級Ⅱコース（2学期）で行なわれ、正宗(2009)でその内容と分析が述べられている。翌 2009年度は基本コースの中上級 I コース（1学期）と上級コース（2学期）一筆者がコーディネートしたコースで行われた。本稿では、2009年度の活動記録を振り返り、実践報告をする。

正宗(2009)では、日本語教育センターにライティングセンターを設置する背景、およびその目指す理念について、次のようにある。

背景：教室内では、教師が大勢の学生を相手に個別に指導する時間が制約されているため、文章を作成する過程で考えを深める指導や、各学生が置かれた状況に沿った指導が難しい。日本人 TA との個別の対話を通じて一緒に考える環境の整備は、この問題に対応できる。
(pp.109-110)

理念：「問題意識や物事を掘り下げる力、文章を組み立てる力を日本人 TA

からの文章作成過程での働きかけによって向上させ、書く力を自ら身につけることを目指す」(p.112:2-4)

ライティングセンターの本来の姿は、学生が必要な時に自由に訪れて相談を受ける、という形であろうが、まだ試行段階であるため 2008 年度同様、2009 年度も学生一人一人に行くことを義務づけた。そして、活動後 TA からは報告書を、学生からは活動メモを教員に提出してもらい、さらに学期の終わりには学生に対してアンケートを行って、感想や問題点などを聞いた。

1. 実践したクラスについて

活動を行なった中上級 I コース（1 学期）と上級コース（2 学期）は、日本語教育センター基本コースの 4 つのレベル別クラス中一番上のレベルに位置するが、本稿では 1 学期の中上級 I コースで行なわれた活動について報告する。

以下に、1 学期の中上級 I コースの人数、学生の出身地、性別の人数、所属を示す。台湾 13（1）は、台湾人学生が 13 名で、そのうち 1 名は男性、ということを表す。

<中上級 I コース>

総数：19 名（台湾 13(1)、韓国 3(1)、ベトナム 1(0)、日本 1(0)、香港 1(0)）

所属：別科正規生 17（2）、日本語・日本文化専攻 1(0)、学部特別聴講生 1（0）

2. 連携した日本語作文授業について

2009 年度の中上級 I コースでは 1 週間に 3 コマの作文授業があり、3 名の教員がローテーションで行なった。教材は、倉八順子『日本語の表現技術—読解と作文—上級』（古今書院）で、1 学期は 1 課（序論・本論・結論）と 2 課（起承転結）を学習し、その課の構成と表現に従って、2 つの作文（800 字程度）を書き上げた。

● 1 課分の流れ

1. 本文を読解する。
2. 構成と表現を学ぶ。
3. 作文のテーマを決めて、資料を探す。
4. 教員と面談（作文の概要を説明する） } ⇒活動1（40分）：内容の相談
5. 下書きを書いて提出する。
6. 教員が下書きを添削して、返却する ⇒活動2（40分）：直しの相談
7. 清書を提出する。
8. 教員が清書を文集にして、学生に配布。
9. グループで文集を読み合う。 ⇒活動3（40分）：朗読練習
10. 朗読テスト

ライティングセンターは1課分の流れの中で上のように3回の活動を行なったが、実はこのクラスではすでに2007年度から授業の中に教員面談（流れ4）を組み込み、ライティングセンターとほぼ同様の活動を行っていた。時間は学生1人に対して10分～15分程度で、その間、他の学生たちは各自の下書きを書き進める。このような活動を取り入れた背景は、やはり「はじめに」で正宗(2009)から引用したものと一致する。この教員面談が、すでに教員側においても作文の指導や評価上不可欠なものとなっていたところに、さらにライティングセンターを各活動40分ずつで組み込んだため、学生の立場からすると同じような活動を2回することになった。これに対して学生の反応は1学期のアンケートでは特になにもなかったが、2学期の方を見ると、15名中3名から先生とTAの意見が違うことがある、という指摘があった。

1. 先生の意見とTAさんの意見が違うところがありました。（TAの報告書によると^{注1}、この学生は「先生との面接だと時間が短い、TAだとたっぷり時間が取れてよかった」とも言っている。）
2. 先生とTAの間がはっきりしていなくて、困りました。矛盾した部分があった。（TAの報告書によると、この学生は「先生との面接が済んでから、TAが入る方がよいと思う。順序が逆になるとやりにくい」

とも言っている。）

3. たまには、TA 先生と先生の意見が違うことがあります。ちょっとどちらのほうがよいとまよいました。でも、これもライティングセンターのメリットかもしれません。その違う意見の中で、自分で考えて伝えたいことをちゃんと伝えるように書けばいい勉強になると思います。

3の学生は、このような状況をむしろプラスと捉えている。

本稿では、第1学期の2つの作文に対して行なわれた活動の中で、「内容の相談」について報告する。1学期は指定された構成にしたがって自分の考えを述べる意見作文を書いたが、2学期は大意文、引用文を中心に勉強した。そのため、「はじめに」で正宗(2009)が述べる本ライティングセンターの理念（問題意識や物事を掘り下げる力、文章を組み立てる力を日本人 TA からの文章作成過程での働きかけによって向上させ、書く力を自ら身につけることを目指す）にかなった活動は1学期の意見作文に対する「内容相談」であろうと思われる。

3. 日本人 TA について

日本人 TA は本学の学部生2名、大学院生3名の計5名が集められた。

TA 1 : 外国語学部 4 年

TA 2 : 外国語学部 2 年

TA 3 : 言語教育研究科博士前期 2 年

TA 4 : 言語教育研究科博士前期 1 年

TA 5 : 言語教育研究科博士前期 1 年

学期はじめに、上記 TA5 名と、中上級 I の作文授業担当教員中 2 名、共同研究分担者中 2 名が集まり、打ち合わせをした。コースコーディネータの筆者が TA にお願いした活動内容は以下のとおりであった^{注2}。

活動 1 : 作文の骨組を作る

- 構成 : 構成に従っているか、キーワードがうまく使われているかを

見る

- 全体の流れ：文の関連性があるか、全体として流れがおかしくないか、内容が不十分（または入りすぎ）か、といった点について話し合う。
 - わかりやすさ：会話や質問を通して、読み手がよくわかるように内容を充実させていく。わかりにくい箇所を指摘、何を加えるか、などを口頭でやりとりする。
- ※下書きの段階までは文法などには手を加えず、内容のアドバイスをする。

活動2：教員が添削した下書きを一緒に確認、訂正、練り直して清書する

- 教員に直された作文を見ながら、学生からの質問を受けたり、説明させたりして作文を直していく。
 - 清書は学生が宿題として完成させる。
- ※ 教員は青ペンで添削。学生、TAは赤ペンで記入する。
- ※ TAはあくまでも内容を深めていくための支援的な立場に徹し、会話や質問を通してそれを行なう。学生が答えを出せなかった場合は、引き出すためのヒントは与えるが、TAが答えを言うことは避ける。

活動3：朗読練習の指導

- 漢字の正確な読み方、アクセント、表情の付け方など時間の許す範囲内で指導する。
- ※ 報告書はワープロでフォームに記入し、授業担当教員に添付で送付する。
- ※ 各学期終了後に教員とTAが集まり、報告会をする。

4. 活動記録から

学期末には学生に対して、この活動に対するアンケートを行なったが、1学期末の結果の中で、次の点に注目して、結果をまとめてみた。

質問 12. どの活動がよかったですか。（内容の相談 直しの相談 朗読練

習)

⇒結果：内容の相談（7名） 直しの相談（10名） 朗読練習（5名）

質問 13. 自由に参加できるライティングセンターがあったら、あなたはこの制度を使いますか？（1 全然そう思わない～5 とても思う）

⇒結果：1（1名） 2（0名） 3（3名） 4（8名） 5（6名）

質問 12 で「内容の相談」を挙げた学生のうち 2 名は、今後この制度を使いたいかという質問 13 がそれぞれ 1 と 3 なので、この活動を積極的に評価したと言うよりは、「直しの相談」や「朗読練習」と比較して、消去法で「内容の相談」を選んだようである。一方、「内容の相談」を選び、且つ質問 13 で 4 以上を選んだ学生は 5 名である^{注3}。彼らはこの活動を積極的に評価したものであると思われる。以下では、この 5 名の活動記録を紹介する。

TA と学生の組み合わせは 1 学期は教員が指定し、1 つの作文の間は原則として同じ TA に当たるようにした^{注4}。

4.1 第 1 課の作文に対する活動

第 1 課で学ぶ構成と表現は以下のようなものである。

1. 序論：～とは何だったのだろうか。
2. 本論：～には 3 つある。それは A,B,C である。まず、A であるが、～。次に B とは～。最後に C については～。
3. 結論：（以上述べたことをまとめると～。）～と言えるのではないだろう

この課では A,B,C の 3 つのキーワードがきちんと選べるかが一つのポイントとなる。

学生 1 (台湾・女性 質問 13 : 4)

日本語能力は中上級レベルに達しており、文法力も会話力も高かった。真面目で、着実。クラスメートによく目配りをし、人望が厚かった。作文で伝えたいものを最初からはっきりと持っており、ライティングセンターに臨む

前に、すでに構成に従って内容を考えていたが、TA にその内容を否定されたと感じ、理解を示しながらも動揺した。しかし、最後は達成感が感じられるような作文が書けたようである。

【活動 1-1】

□TA 4 の報告書から：

- ・「宮沢賢治が童話で伝えたいこと」をテーマに、賢治の境遇、宗教との関連など3項目を分けて記述してあった。…テーマがあまりにも大きすぎるのでもっとしぼったほうがいいのではないか。…一つの作品を取り上げて批評したり、テーマの関連するいくつかの作品を比較したりするのはどうか。
- ・テーマが大きすぎるのではないかと指摘すると、不安な表情になった。
(2009.4.30)

■学生の活動メモから：^{注5}

テーマ「宮沢賢治の童話、何を伝えたいのでしょうか。」
…TA は私のテーマは修士論文のテーマで、範囲が大すぎて、なるべくしぼったほうが良いと言いました。例えば、宮沢賢治の童話作品の中で一つを選んで、その文章について、感想文を書きます。この活動を通して、自分の盲点に分かることができます。しかし、困るところもあります。今日は TA が教えた作文構成と教科書の中で書いたポイントと違います。どうしたらいいか分かりません。

○教員 C の授業報告ノートから：

…TA の意見も受け入れたいけど、自分のこの考えも気に入っている、と葛藤があるようでしたので、最終的に書くのはあなた自身なんだから、TA の意見は参考にして、もともとの考えで行きたいならそれでいいと言いました。とはいえ、彼女は童話について語っているのに、童話の内容には全然触れずに仏教の影響などを述べる計画のようでしたので、TA が言うようにもっと童話の内容から自分の考えを説明したほうが良いと言ったら、納得した様子でした。(2009.5.1)

【教員面談】

○教員Aの授業報告ノートから：

「宮沢賢治のメッセージ」

1. 自然への愛 2. 命の大切さ 3. みんなの幸せ

TA との話し合いではテーマが広すぎるということでしたが、今日までに、それぞれのメッセージが表れている作品とその具体的な場面やストーリーを含めた内容を考えてきていて、とてもよく考えられていると思いました。結論はまだ決まっていないということですが、そこにもメモがあり、きっと面白いレポートを書いてくれると思います。(2009.5.11)

【活動1-2】^{注6}

□TA4の報告書から：

- ・今回の作文は、根拠をもって意見を言わなければいけないと考えたので、前回は少しその点をきびしく指摘しすぎたきらいがある。そのため本人を不安にさせてしまった。もう少し大きな目を見て、よい点をほめていくことが必要だと感じた。
- ・下書きが出来上がって、「ああ、こういうことが言いたかったのか」と発見するところがあった。本人の意図を十分に理解しないで指導していくことの危険性を感じている。
- ・前回は不安そうに見えたが、今回は表情が明るくほっとした。自分なりに達成感を感じているようだった。

■学生の活動メモから：

…文法が正しいけど、日本人はあまり使わないことに注意しなければならない。文法だけでなく、単語も同じです。つまり不自然な日本語の表現。それは本当に難しいと思います。

■1学期終了後のアンケートから：

TAさんと作文の内容を相談したり、朗読練習したりすることが、大いに助かりました。この活動を通して、文型と会話との運用力が少しアップして、よかったと思います。…作文の力に役に立つので、これからも、

TAさんと相談することを楽しみにしています。

学生2 (台湾・女性 質問13:5)

中級レベル。4技能のバランスが比較的いいが、文法では初級レベルの誤りがやや目立った。相手に自分の言いたいことを伝えたいという気持ちが強く、多少文法が間違っても気にせず話す。前向きでしっかりしている。作文は最初はあまり自信が持てなかったようだが、ライティングセンターの活動を通して自信をつけていった様子が伺える。

【活動1-1】

□TA5の報告書から：

- ・まず、何を書きたいのかについて話してもらいました。その内容と、作文を書く際の、「ひとつはAで、B、そしてC」と内容をコンパクトにまとめた表現に不一致がないかを見直しました。すこしずれがあったようなので、別の表現ができないか、一緒に考えました。また、今後はテーマについての資料集めをし、それを含めてまとめたいと言っていたので、自分の考えと、資料から得た意見をバランスよくまとめられるとよいのでは、という話をしました。
- ・学生さんの表現したい内容を聞き出し、学生さんの語彙力でできるであろう表現方法を提案できたのではと思っています。(2009.4.30)

■学生の活動メモから：

書いた内容についてTAに説明した後、TAは3つの理由、タイトルについて、意見を提出しました。自分の考え方、書き方はまた不足で、今回はこの活動でもっと日本語の使い方(話し方)がすこしずつ分りました。また、日本人と交流することはいい経験でした。最初、40分は長いだと思いましたが、実際話した後、40分は短い時間でした。

【教員面談】

○教員Cの授業報告ノートから：

「日本の女性が結婚しない理由」

1. 子供が親に頼り、親も面倒を見る
2. 女性の社会進出→男性の理想像が高い・経済力を持つ
3. 人間関係の希薄化→日常のコミュニケーションが少なくなり、草食系男性が増加

無難な内容をきれいな日本語で説明してくれました。これをきちんと文章化できればいいと思います。(2009.5.8)

【活動 1-2】

□TA5の報告書から：

学生のテーマ：「なぜ結婚しないか」

- ・全文仕上げた作文を持ってきてくださいました。構成に即ってまとめられ、文章も分かりやすく書かれていました。前回話し合った内容や、ご自身の考えも含められ、上手くまとまっていました。所々、表現や文法の見直しを一緒にしました。
- ・中でも感心した点は、本論において構成を細分化していたところです。本論において理由を3つ挙げて1つずつ説明しますが、その一つの中でもさらに2つに細分化し、説明を加えていました。話したい内容が多かったため、そのようにしたのかと思いますが、私が見た限りではくどくなくコンパクトにまとめられていて、わかりやすかったです。よいやり方だと思うと学生さんにも伝えました。
- ・ご本人は作文のできがよいのか不安がっていたので、よくかけていた事をもっと伝えてさしあげればよかったと思いました。その後に担当した方と比べると、特によくかけていたので、後々そう感じました。

(2009.5.14)

■学生の活動メモから：

テーマ「なぜ結婚しない」

今回は内容について全体の構成や使い方など討論しました。前回、TA先生と相談した後、TA先生は私の3つのキーワードがいい意見を提しました。そのおかげで、自分の資料を捜かす時、もっといいキーワード

を出ってきた。今回は全面的に構成、使い方について討論、直すことはいい経験でした。

■ 1学期終了後のアンケートから：

自分の考え方ではなく、ほかの人の意見も分かって、相談して、いい作文を書いて、いいと思います。また、作文だけではなく、同時に会話の練習もしました。ライティングセンターは本当によく役に立ちました。

学生3 (台湾・女性 質問13:4)

初級修了レベル。日本語会話にはまだあまり慣れていない。毎回はやめにテーマを決めては参考文献を何冊も集めて読み、作文に非常に熱心に取り組んでいた。活動1-2は、変則的に入れた活動で、サインアップして自分でTAを選ばせた。他の多くの学生が可能な限り活動1-1と同じTAを選んでしたが、この学生は別のTAを選んでいる。より多くのTAの意見が聞きたかったのか、単に時間的に都合が悪かったのかは不明である。

【活動1-1】

□ TA4の報告書から：

- ・ テーマは「収納の日本文化」で、日本の収納技術の高さの理由を、
①狭い、②日本特有の多面性をもつ多様な空間、③？（メモのし忘れ）
- ・ 日本の「狭さ」を数字で表せないか？(1)は簡単に出せるが、(2)は難しい？
(1) 国土面積と人口→人口密度、一人当たりの土地の広さ
(2) 一軒あたりの家の広さ→どこかに統計がないか。
③は、日本人の手先の器用さや技術の高さについて話していたように思う。
- ・ 内容的な面ではほぼ出来上がっているように思う。後は技術的な問題である。書くことには、あまり自信がないと話していた。
- ・ デザインへの関心と豊富な知識が、収納という視点から日本の文化

を考えるとという着想を生み出していることを実感した。（2009.5.7）

■ 学生の活動メモから：

テーマについて、作文の内容と捜した資料を TA の先生に説明しました。資料の調べ方、たとえば「なぜ日本の家は狭いですか」について、日本と別の国の人口密度を比べて、正しいデータを捜します。あともっと具体的な例を説明するの方がいいと思います。

【教員面談】

○ 教員 A の授業報告ノートから：

「日本の収納文化が発展した理由」

1. 家の狭さ
2. 収納の情報
3. 収納の工夫

序論のところで、「収納文化のキーワードを3つ」と、あいまいだったので、どういうことを書きたいか聞いたところ、収納文化が発展している理由だということでした。非常によくまとめられた構成メモを持ってきていて、よくがんばっていると感じられました。（2009.5.11）

【活動 1-2】

□ TA 2 の報告書から：

序論：背景

本文：狭い家、収納の情報、収納の工夫

結論：まとめ

結論に何を書くのか迷っていたようでした。教科書のようにまとめた後一言書くのはどうかとアドバイスしました。（2009.5.14）

■ 学生の活動メモから：

文型の使い方をチェックしてもらいました。正しい文型を使いました。構成の組み立て方をなおしました。

■ 1 学期終了後のアンケートから：

TA の先生からいい意見をもらいましたのはとてもよかったです。日本

人の経験を聞きながら、自分の意見を考えるのは面白いでした。ライティングセンターの時、新たな考え方が生まれました。楽しかったでした。ある時、クラスメートから“TAの先生たちのアドバイスは全然違う”と聞きました。でも、私にとっては、自分が最後の決定者です。TAの先生の意見も大切し、自分の考え方も重要だと思います。

4.2 第2課の作文に対する活動

第2課で学ぶ構成と表現は以下のようである。

1. 起：～する必要があるか。
2. 承：～を考えてみる。～に関する限り～。
3. 転：～の場合にどうして～。なるほど～。しかし～。要するに～。
4. 結：結局～。

この課の作文を書くときにしばしば問題となるのは、「起」の問題提起と「結」の主張がきちんと呼応しているかという点と、「転」で「承」と逆のことがはっきり述べられているか、という点である。

学生4 (台湾・女性 質問13:4)

日本語会話に慣れており、コミュニケーション上は全く問題がなかった。総合的には中級レベルにあったが、細かい文法では初級レベルの項目でも不確実な部分があった。自分なりのテーマを選び、構成に従って作文の内容を膨らませていくといった作業にやや苦痛を感じていたようで、ライティングセンターで相談しながら書ける機会は彼女にとって貴重だったようである。

【活動1-1】

□TA5の報告書から：

学生のテーマ「日本のマナー」

- ・まだ「マナー」の何についてテーマにするか具体的に決まっていない。
…なぜ「マナー」に焦点をあてたのか、そのきっかけについて話してもらおう→レストランの店員の振る舞いは台湾人より親切でマナーがよ

い。／「ってきます」「ただいま」を言う日本の言語文化など→テーマとする焦点が定まっていない。⇒学生が「結」で言いたいのは、「台湾人はマナーが悪い」ということのようなので、それを論理的に説明できる事柄を選択し、テーマとするのを勧めた。

- ・レストランの店員のマナーは店の中で決まっていることなので、個人差が生まれにくい。それと台湾の場合を比べたら分かりやすいだろう。個人差の生まれにくい設定を選んだほうが、説得力があるものに仕上がるとアドバイス。
 - ・何をテーマにするか一緒に考え、私なりの意見を言ったが、学生の中で関心が分散してしまっているようで、テーマを決められなかった。
- (2009.5.28)

■ 学生の活動メモから：

テーマの範囲が広い。もともと原点に考えて見やすい下書きを表す。TAからのアドバイスについて作文の内容はちょっと思い付いた。

【教員面談】

○ 教員Aの授業報告ノートから：

テーマ「笑顔は世界の共通語」

結論は決まっていますが、いろいろ考えているエピソードはどれもよくわかるのですが、結論へつながる構成になっていません。彼女もその点はよくわかっているのだから、考えてくるように言ってあります。(2009.6.1)

【活動1-2】^{注7}

■ 学生の活動メモから：

最初自分で考えて起承転結の内容は連れられないから、下書きの段落はばらばらだと思います。TA5と相談した後、文章構成の内容は変わる。書きやすいと思います。(2009.6.2)

■ 1学期終了後のアンケートから：

作文を下書き前、TAと一緒に相談したら、作文は書き易いと思います。…毎回私は作文の下書き悩むとき、ライティングセンターに参加した後、

作文の考え方と内容の構成は大体分かり易いと思います。ライティングセンターは役に立ちと思います。

学生5 (台湾・女性 質問13:5)

総合的には中級レベルだったと思うが、文法では初級レベルの間違いをすることもあった。知的好奇心が強く、社会性のある着眼点が目立った。相手に何かを伝えようとする気持ちが強く、多少文法が間違っても気にせず話し続ける。常に前向き。ライティングセンターで自分の関心のある事柄について日本人TAと話し合えることに満足していたようである。

【活動1】

□TA4の報告書から：

- ・会社が不景気のため社員をリストラすることについて、自分の考えを書きたいとのことであった。雑誌のコピーを持参するなど、事前に準備をし、作文メモもきちんと書かれてあった。作文メモの内容は次のとおりである。

起—不景気の背景、リストラは唯一の方法か？

承—不景気に対する企業の対策…コスト削減、リストラ（派遣社員のリストラなど）

転—リストラの結果は…1人分の仕事が増える、仕事のミスが増える、信頼関係が崩れる。

結—リストラすることと、別の方法（人材の確保や業務の改革など？）とを比較し、リストラが結果的には企業にとってマイナスであること。

- ・メモは箇条書きであったが、話を聞くと、上記のようにかなり明確に答えていた。かなり出来上がっていると思った。
- ・できるだけ具体的な例をあげること、特に身近な問題を取り上げるとは有効であることを話した。
- ・日本語での会話力が高く、日本人と話しているような感じがした。こ

れだけ話せると、作文の助言もしやすい。細かな点まで指摘したが、かなりわかってもらえたと思う。(2009.5.28)

■学生の活動メモから：

私のテーマについて説明いたしました。テーマはちょっと硬いですが、自分の友達の例を入れればいいとアドバイスをもらえました。そして“承”の部分が社会中の例（事実の現象）を調べて、具体的な事実を書けば文章がよくなれると相談しました。文章の内容をもっと理解できました。心から感謝しております。

【教員面談】

○教員Bの授業報告ノートから：

（6月2日のノートの中に学生5の筆跡で作文のアウトラインを詳細にペンで記した紙片が挟み込まれていた。結論の下の部分には別の筆跡で「一般論」「あなた自身」などといった書き込みが鉛筆書きされており、教員Bが、学生5の結論は一般論だからあなた自身の意見はどうかと問いかけて討論した跡が見られる。）

テーマ 「来月から来なくていいよ」

○起 (事例) 今年の2月中旬、友達が会社に「来月からこなくていいよ」と言われた。その原因を聞くと、会社はただ業績不振を理由として簡単に説明した。

(現実) 世界不況の中、大手な電気メーカーの業績の悪化とリストラがさらに加速している

- ・ NEC—業績の悪化を受け、グループ全体で正社員を含む二万人超を削減すると発表した(〇〇新聞 月 日)
- ・ ソニー—3万6000人、最大規模となる(1万6000人を上回り、)

問—会社の永續の経営に対して、リストラは唯一の方法ですか？

○承 会社は経営に対して、リストラの原因→経費不足

一般的に対策 { 人件費の低減
無駄な経費を省く } ←事業の縮小、工廠の閉鎖、
給料を下げる } 倒産

○転 しかし、人員削減→仕事が増える、仕事のミスも増える
会社との信頼関係が壊わす

「社員はコスト」を除く 雇用制度の調整、人材教育を通して→「会社にとって社員は会社の財産」

松下幸の助—経営策は「不景気になっても志さえしっかりと持っておれば、それは人を育てさらに経営の体質を強化する絶好のチャンスである」

○結 不況の時期 { 人材確保
業務の改革 } など企業の発展にとって、正しい確
{ 信頼感を深め } 実的な方針
{ 人材教育 } (不況の時こそ、企業のチャンスだ。)

(2009.6.2)

■ 1学期終了後のアンケートから：

作文を書くとき、内容と直しの相談があって、本当によかったと思います。自分が書きたいこと TA と相談して、もっと正しい、日本人らしい日本語を教えてもらえるのが良かったと思います。ライティングセンターの時間はもうすこし長くなればよいと思います。ライティングセンターの制度が2学期もやり続けてほしいと思います。

おわりに

以上、2009年度の活動を振り返り、「内容の相談」の活動に意欲を示した5名の活動記録を紹介した。一口に意欲を示したといっても、アイデアが浮かばなくてTAに支援を求めたり、TAと話し合うことによって自信を得ようしたり、討論を通して作文をより進化させようしたり、等々、その動機はいろいろあったと思うが、ふと気が付けば全員20代半ばの台湾の女性である。どうやら総じておしゃべり好きで、ある程度人生経験もある学生が「内容の相談」をうまく活用できたと言えそうである^{注8}。

ところで、学期末のアンケートを見ると、「内容の相談」よりも「直しの相談」を評価する学生が多く、2学期になるとその傾向はさらに強くなった。2学期は12月上旬の日本語能力試験を控え、日本語の勉強をしている実感の持てる方が学生には望ましかったのかもしれない。この「直しの相談」については、いずれまた別の機会にまとめてみたいと思っている。

注

1. 1学期のアンケートは、夏休みの宿題としてメールで送り返してもらう形で実施したが、2学期はライティングセンターに組み込み、TAが直接インタビューする形で実施した。
2. TAへの活動内容説明のプリント、報告書フォーム、学期末アンケート等を作成するに当たっては、前年正宗鈴香准教授が作成された文書（参考資料1～4）を参考にさせていただいたり、あるいはそのまま引き継がせていただ

いた。

3. 5名中3名(学生1・2・5)は、「内容の相談」を含む3つの活動をすべて選んでいる。
4. TA1～3は回数が少なかった。そのため、以下で紹介する5人の活動記録の大半はTA4とTA5の報告書に拠っている。
5. 学生の活動メモと学期末のアンケートは、文法などの誤りがあっても、そのまま引用する。ただし人名はTAなどの一般名詞に置き換えた。人名の置き換えは、他のすべての記録でも同様にした。
6. 前掲の「1課分の流れ」では「内容の相談」は1回だけであるが、第1課では変則的に任意で20分の「内容の相談」を入れてみた。義務づけなかったため、19名中7名は参加しなかったが、今回紹介する5名は全員参加した。
7. 第2課では任意の活動1-2は入れなかったが、この学生はキャンセルのあった時間帯に自主的に入った。そのため彼女だけは活動1-2があるが、飛び入りであったためTAからの報告書はない。
8. 2009年度中上級Iコースでは、韓国、ベトナム、香港、日本の出身者がすべて学部生(または高校卒業者)であったのに対して、台湾の出身者は、すでに大学を卒業して、会社などで働いた経験のある人が大半であった。本稿で紹介した5人も、4人は社会人の経験があり、1名は大学院出身者(日本語専攻)である。

引用・参考文献

- 正宗鈴香(2009)「文章支援のためのティーチング・アシスタント向けマニュアル考案—ライティングセンター(仮称)設置にむけて」『麗澤紀要』第89巻 麗澤大学出版委員会

引用資料

1. 2009年度中上級IコースTAからの毎回の活動報告書
2. 2009年度中上級Iコース学生からの毎回の活動メモ

3. 2009 年度中上級 I コース作文授業の教員連絡ノート
4. 「2009 年度 1 学期（中上級 I）ライティング・センターについてのアンケート」（中上級 I コースの学生を対象に実施、2009 年 8 月 3 日付）

参考資料

1. 「2008 年度初級コース ライティングセンター運営の方針」（2008 年度 学術研究助成申請 研究課題：ライティングセンター設置への基礎研究、正宗鈴香准教授作成、2008 年 4 月 10 日付）
2. 「ライティングセンターTA 第 1 回打ち合わせ」（正宗鈴香准教授作成、2008 年 4 月 24 日（木）配布）
3. 「報告書 A」（TA からの報告書のフォーム、正宗鈴香准教授作成）
4. 「2008 年度 1 学期（初中級 I）ライティング・センターについてのアンケート」（正宗鈴香准教授作成）
5. 「ライティングセンターTA 第 1 回打ち合わせ」（筆者作成、2009 年 4 月 22 日（木）配布）
6. 中上級 I コース ライティングセンターTA 報告会の記録（筆者記録、2009 年 7 月 23 日（木）2105 教室にて）
7. 「2009 年度麗澤大学別科中上級 作文集 第 1 課 松下幸之助」
8. 「2009 年度麗澤大学別科中上級 作文集 第 2 課 湯川秀樹」

付録

以下に学生の作文を載せる。これらは「直しの相談」を経て文集に載せた完成原稿である。指定された表現、またはそれを意識したと思われる部分に下線を引く。

<序論・本論・結論>

学生 1 「純真を取り戻せ！」

宮澤賢治は日本の代表的な童話作家であり、詩人でもある。生前にはほとんどが知られていなかったが、なぜ今人々に知られるようになったのだろう。賢治は

童話を通して、何を伝えようとしたのだろうか。賢治の童話からのメッセージには3つある。それは「自然への愛」、「命の大切さ」、「みんなの幸せ」である。

まず、自然への愛であるが、賢治は故郷の岩手県の自然に溶け込み、山や森や動物などを主人公とする童話をたくさん書いている。『狼森と笹森・盗森』には、次のような部分がある。「『ここへ畑起こしてもいいかあ』『いいぞお』森が一斉に答えました。『ここに家建ててもいいかあ』『ようし』森は一ぺんに答えました」。このように人間と自然との交流が描かれている。言うまでもなく、人間は自然と「言葉」を交わすことができない。しかし、「こころ」を通じて、自然と共存することはできるだろう。人間は万物の王様ではなく、自然の恵みのおかげで、生きられる。だからこそ、自然を勝手に利用し、破壊してしまう権利はない。自然界の万物に感謝すべきだ。

次に、命の大切さであるが、地球に生まれた生き物はみんな仲間、兄弟であるという仏教の生命観の影響で、賢治は動植物も人間も同じように生命を持ち、お互い仲良く、尊敬しあわなければならないと考えた。『注文の多い料理店』という作品では、二人の紳士がただ殺すのが楽しいという理由で動物を殺す。しかし、料理店に入ると、逆に自分たちが食べられるものになってしまった。生存するために、他の生き物の命を食べていくのは現実だ。しかし、何の理由もなく、命を粗末にすることは絶対許せない。

そして、最後に、みんなの幸せについてであるが、『グスコブドリの伝説』は賢治の自伝に近い作品である。冷害のため、家族を失ったブドリは火山局の職員となり、農民たちの幸せに力を尽くす。冷害を防止するために、自らの命を犠牲にしても惜しまない。個人の幸せより、人々の幸せを大切にすることが賢治の願いだった。

以上述べたことをまとめると、賢治の童話からのメッセージ、一つは自然への愛であり、自然界の万物に感謝すべきだというものである。次は命の大切さであり、命を粗末にすることは絶対いけないというものである。最後は、みんなの幸せのために、役立つ人間になるのが大切なことだというものである。人間は年をとるにつれて、だんだん現実的になり、自然に対する親愛感も失っていく。しか

し、もし人間が子供のような純真な気持ちを持っていれば、自然に他人のことを考え、すべての生命への思いやりが生まれる。したがって、童話のような真善美に富む世界になれるだろう。

学生2「なぜ、結婚しない」

時代の変遷に従い、独身者あるいは結婚しない人が増加してきている。「厚生労働省－日本の世帯数の将来推計（全国推計）2009年3月推計」によると、2005年に単独世帯数と割合も約1446万世帯、29.55%で、2030年になると、約1824万世帯、37.4%と、全体の4割近くに達する見込みである。言い換えれば、独身者は増えつつあるのである。その現象を見て、独身者が増えている理由とは何だろうか。それは「パラサイト・シングル」、「女性の社会進出」、「コミュニケーション」である。

まず、「パラサイト・シングル」であるが、これは「卒業後も、基礎的生活条件を親に依存している未婚者」である。そういう人がいる現象には二つの原因がある。その一つは、「親の愛情」と呼ばれるものである。日本の経済不況と少子化の影響で、子供にはできるだけのことをしてやりたいという親の意識が高まり、若者が親たちの保護と援助を受ける時期が長くなってきている。もう一つは、若者たちも親から身の回りの世話を受け、自由で、経済的、物質的に恵まれ、快適に暮らしているシングル貴族になり、自立したくないという気持ちを持つようになり、未婚者が増加してきたのだろう。

次に、「女性の社会進出」であるが、女性も社会に出るとともに、経済的、精神的に自立していける能力を身につけてきた。このことで起きた結婚観の変化は2つのタイプに分けられる。一つは「高い水準の相手でないとう結婚しない」という考えである。自分の条件が高くなったので、期待するような結婚相手の条件も以前と比べて、厳しくなった。望ましい相手でない場合は、妥協したくないから、理想的な相手を捜しつづけようと考えている人の結婚の年齢は遅くなる。もう一つは「結婚という形を積極的には必要としない」人もいる。そういう女性は個人の自立性を尊重し従来の性別役割にとらわれない新しい関係を実践し、別に相手がいなくても一人でやっていくマイペース型の人もいる。

最後に「コミュニケーション」であるが、現在の社会は「人間関係の希薄化」という現象があり、また「草食性男子」という若者が増えている。娯楽の多様化やインターネットの普及などにより、男女関係を含む、人と人の関係が淡泊になる傾向がある。また、一人でいることを好み、他人との付き合いを面倒くさく、煩わしいと感じる。一人は楽だし、自由だし、他人の目も気にしないという考え方の若者が増えている。そのうえ、人との交流の機会が少なく、コミュニケーション能力も下がってきている。また、女性の社会的地位は向上し、能力も高くなってきている。こういう女性に対して、積極的に動こうとせず、あきらめてしまう草食性男子がいる。積極的にアプローチしない、もしくはできない男性は女性との距離感が大きくなってしまう。

未婚あるいは非婚には以上三つの理由があって、将来に生じる問題は少子化と独身高齢老人である。結婚の年齢は遅くなり、経済不況があり、子どもの人数は減っていくだろう。さらに、独身高齢老人の介護などの問題事が起こっている。社会的に大変なことになりつつある。

学生3「収納の日本文化」

日本の住宅は収納スペースに工夫を凝らしている。収納の情報と工夫はとても優れていると思う。日本の収納はなぜすごいのだろうか。日本において、「持ち家」と「借家」に大きな差がある。その理由としては、旧来からの「持ち家志向」の影響が考えられる。「借家」はどうしても「いつか家を買うまでの仮住まい」になりがちだったのである。地価の上昇も主因の一つだろう。いつか自分の家を買うつもりで、今は我慢してもよいと思っている。収納の日本文化が発展した理由については、3つのキーワードが考えられる。それは「狭い家」、「収納の情報」、「収納の工夫」である。

まず、「狭い家」であるが、なぜ日本の家は狭いかというと、その原因は日本は都会人口が集中しているからである。そのため一人の人間に割り当てられる面積は小さくなる。「アジアの国の人口密度」によると、日本は 343、台湾は 636、韓国は 491、中国は 136 である。実際に近くのと国と比較すると、日本は決して狭くはない。でもどうして日本の家は狭いのだろうか。その理由としては、日本の

物価は他の国より高いので、お金が足りない人は「いつか自分の家を買うつもりで、狭いけれども、家賃が安いから、今は我慢できる」と思っていることが考えられる。また日本では建物の面積は限度がある。広い家がほしいけれど、でも面積は限度がある。

次に「収納の情報」であるが、日本では収納に関する情報があふれている。例えば、テレビや雑誌を参考にすることもできる。主婦向けの雑誌によくいろいろな収納術が掲載されていて、写真もポイントも見やすい。人気番組「大改造！！劇的ビフォーアフター」は所ジョージが司会を務める家のリフォームの番組である。お風呂のない家、狭い通路を通らないと中に入れない家などとんでもない家を家造りのプロがリフォームをして、とても人気の番組である。もう一つはインターネットで調べて、自分の調べたいトピックについてもっとも適当な情報を探し出すこともできる。日本人は自分のニーズと知りたいことを雑誌やインターネットで探し、同じことをするのではなく、「なるほど！」と思えるたくさんの収納術の中から自分のライフスタイルにあった収納術を上手にマネすることが素晴らしいと思う。

そして最後に「収納の工夫」については日本の家は多面性を持つ多様な空間である。例えば、床下収納や壁収納は家具などがごちゃごちゃせず、わが家もリフォームしてもらいたいと思うような工夫がされている。日本で収納の用品は便利なアイデアがいっぱいあるから、誰でも収納を簡単にできるようだ。

日本で限りある敷地で最大限居心地が良い家に住みたいというのは万人の願いだろう。しかし現実的に空間が不足している。だから、日本人は収納を増やすことで限りある面積を増やしている。そうしたことでより快適な生活を実現させている。日本の収納文化は素晴らしいので、その知恵を集めて、母国へ帰る時、家族と友達に伝えたいと思っている。

<起承転結>

学生4「世界の言葉」

言葉とは人間と人間が「コミュニケーション」を取る一つの方法である。しかし、言葉以外に伝える方法はないだろうか。その点について考えてみよう。

どのような話し方によって人の気持ちや感情などの伝わり方は様々だ。自分の気持ちをストレートに話す人もいる。自分の言いたいことを言わずに、感情を抑えて話す人もいる。では、感謝の気持はどのように伝えるだろうか。「ありがとう」という感謝の気持ちを人に伝えると相手もうれしいだろうし、そう伝えられて自分もうれしい。では、ほめることはどうだろうか。人はほめられると、いい気持ちになる。でも貶しめられた時、周りの景色は曇ったように見える。つまり、言葉は人の心や気持ちを変える、そんな力を持っている。

しかし、国によって言葉は違う。言葉が通じずに、自分の気持ちをどうやって伝えられるだろうか。それは言葉以外の手段を用いたコミュニケーションがある。身振り、姿勢、表情、視線などでも気持ちを伝えることができる。ボディラングエッジは身体の動作を利用して、身振りや手まね、あるいは広くジェスチャーで様子などを表して、相手に意志を伝えるものである。人の表情から怒り、悲しみ、恐れ、驚き、喜びなど気持や感情を読み取ることができる。私は海外旅行中、人に道を尋ねたが、相手と言葉が違い、全く通じなかったことがある。その時、私はボディラングエッジを使って、道を尋ねることができた。相手は私の気持ちを感じて、笑顔で答えてくれた。そして、私を行きたい所へ連れていってくれた。「スマイル」は世界共通の言葉と言われている。

つまり、コミュニケーションをとる方法とは言葉だけではなくて、ボディラングエッジや表情などいろいろな手段がある。とくに笑顔は言葉ではないけれど、愛の感情を伝えることができる。心からの笑顔が一番素敵な言葉だと思う。

学生5「来月から来なくてもいいよ」

今年の二月中旬、大学時代の友達が「会社に来月から来なくてもいいよ」と言われた。その原因を聞くと、会社が業績不振という理由を説明されただけだったそうだ。不況の今、業績が原因で、リストラをしている会社が大幅に増えた。会社が不況を乗り越えるため、リストラは本当によい方法であるのだろうか。会社の長期的な発展にとって、人材の確保が大切である。

世界同時不況が長引き、大手の電機メーカーの業績が悪化し、リストラがさらに加速している。リストラを実行した経営者の立場を考えてみる。経営者が会社

を倒産させないために、人員削減や人件費のカットなどの対策を提案している。2009年6月3日の東京新聞の統計によると、日本の主要な電機企業が今年3月末までの半年間に、国内外でグループの従業員を約8万7千人削減したそうである。ソニーが約一万四千人で、NECが一万三千人を減らした。NECは2009年もリストラを続けると発表した。

なるほど景気が落ち込んだ時、経費を省くことが一番重要なことである。人員削減により、人件費も大幅に削減できる。しかし、業績が悪化した時、リストラという対応が企業に予想できない悪影響を与えた。人員を削減すると、残った社員の仕事が増え、労働時間や労働品質などに悪い影響があり、仕事のミスも増えるに違いない。そして、社員と会社との信頼関係が壊れ、仕事に対する責任感が薄れ、会社への帰属意識がなくなってしまうのである。

結局、会社の永続経営のため、リストラは良い方法ではないだろう。企業の長期的な発展にとって、厳しい状態の時こそ将来の成長のために優秀な人材の確保が大切だ。「不景気になっても志さえしっかりと持っておれば、それは人を育て、さらに経営の体質を強化する絶好のチャンスである」とパナソニックを創立した松下幸之助がよく言っていた。企業とは1人でやっていけるものではなく、人々の能力を集め、協働することでなりたつものである。人材教育を通じて、社員は自分の役割を確実に果たすという考え方を持つことが、社員の信頼感を強めることになる。それによって、会社に新たな価値を生み出していく。つまり、危機意識を共有することにより、会社と社員の結び付きがより強くなり、不況を乗り越えることができるだろう。このように考えると、不況の対策としてリストラは、企業にとって良い方法とは言えない。